Re:Write

＊注意＊

この本はアニメ版「ジョーカー・ゲーム」の夢小説です。

登場する人物、事件などは原作、および原作者様とは一切関係ございません。

なお、作中には当時の時代背景に基づいた設定、表現が多くございます。ご了承下さい。無断転載、転売などはご遠慮下さい。

目次

夢主紹介――4
敗軍の化物たち――9
拝啓、泥の中で眠る貴方へ――29
史上最悪の乾杯と晩餐を――47
女王の憂い日――61
主よ、われは深き淵より乞い願う――87
君だけが、僕の世界の全てだった――103
あとがき――122

夢主紹介

仙木（本編軸夢主）

黒髪の前下がりショートで黒目、黒い背広姿の男装の麗人。本名は神山怜華。一人称は「俺」。女ではあるが、生まれてからずっと男として生活してきたため、そこら辺の男よりイケメン。スパイとしての能力も高く、知識などは訓練生たちに勝るとも劣らないが、体力面ではやや不利な場面も。老若男女問わず惚れさせる人タラシ。

九条夏雅（トリップ夢主）

栗色のロングストレートに、金色の目をした美人。就活の帰りにビルの階段から落ちてトリップするという定番をやってのけた自称・雑草系一般人。普段は髪をポニーテールにして、黒いフォーマルスーツ姿で過ごしている。東大医学部生だが、医学以外の知識も豊富なため、結城中佐の命令でD機関専属講師として働いている。男に対してのみドSだが、本性は極めて残酷で、他人を『教材』と称することも。

雪沢 柊（ゆきさわ ひいらぎ）（現パロ夢主）

日本人には珍しい碧眼に、黒髪のショートで、片方の髪だけ三つ編みにしている。高校時代に起こった事故が原因で声が出ないため、スマホのメモ帳アプリか筆談で話す。その時の傷が首に残っているが、本人は気にしていないため特に隠すようなことはしていない。神永とは高校の頃から付き合っていて、神永の就職と並行して結婚。現在は小説やシナリオなどの執筆活動をしている。

※仙木に関しては特にお相手を決めていませんが、田崎さんとの絡みが多いです。九条は逆ハー夢主です。雪沢だけが唯一お相手の決まった子です。また、九条ルートはギャグも含みますので、機関員のキャラ崩壊などがあるかもしれません。ご了承ください。

「救済の花」（仙木篇）

泣かないように必死に笑った

壊れないように必死に耐えた

誰にも縋らず、誰にも弱みを見せないように、全てに嘘を吐いてきた

だけど、暗闇に囲まれると、それは脆く崩れた

止まない涙を拭い、壊れぬように、気付かれぬように、必死に声を殺した

明日も上手に笑えますようにと祈りながら

敗軍の化物たち

ただの偶然だろう。

それはまるで、子供が遊びの延長線上で何かを発明したような、神が暇つぶしに人間を作ったような、そんな偶然と気まぐれ。男が口説き文句に使うような運命論も、新興宗教が叫ぶような神の導きとやらもない。人間が生きている以上、それなりの確立の元で起こり得るであろう偶然と、彼自身の気まぐれが歯車のように噛み合った。ただそれだけのこと。

俺が彼に見つけられたのは、そんな偶然の産物だった。

人間のクズとゴミが溜まる路地裏で、彼はゴミを漁る俺の背後にひっそりと立っていた。

「貴様、ここで何をしている?」

低くもしっかりと通る声が、壁の間で反響した。

ビルとビルの隙間は、聳え立つ煉瓦や鉄筋コンクリートの壁で、妙な圧迫感を感じる。

彼の問いかけに、俺は振り返りもせずに答えた。

「見てわからない? ゴミ漁ってんの。てか、おじさんこそ何してるの。アンタみたいなお綺麗な人間には似合わないよ、こういう場所」

「似合わないのは、貴様の方ではないのか? 神山怜華」

嘲笑と共に聞こえてきたのは、俺の名前だった。
とうの昔に捨てた名前が耳を通った瞬間、体に衝撃が走った。
動揺のあまり、思わず振り返りそうになったが、なんとか堪えた。
どうして俺の名前を？　家を追い出されてから、一度も名乗っていないはずなのに！
もう二度と名乗らないと決め、喉の奥にしまっていた、母の形見とも言える自分の名前。
それを見知らぬ男に知られてしまったという恐怖と不気味さで、体中の神経が凝結したように冷たくなった。
――コイツ、神山家の人間か？　まさか、俺を連れ戻しにきたのか？
あらゆる可能性が脳内を駆け巡り、最悪の未来を弾き出す。
「……アンタ、何者？　なんで俺の名前知ってんの」
震えそうになる声を抑え、後ろを振り返り、息を飲んだ。
そこにいたのは、まるで黒い影のような男だった。
実際に着ている服は地味な灰色の背広だが、彼の纏う空気が真っ黒な影を連想させた。
悪魔、死神、いや、魔王といった方が相応しいかもしれない。
放たれる威圧感が肺を圧迫して、息を重くする。
ゆっくりと、彼の姿を確認した。
帽子を目深に被り、右手で杖を突いて、左足を引きずるようにして立っている。僅かに

覗く口元からは、何の感情も読み取れない。
本当に人間なのか？　いや、そもそも彼はここに存在しているのか？
見れば見るほど、彼には存在感がないことに気付く。
そこにいるはずなのに、瞬きをすれば直ぐにでも忘れてしまいそうなほど、不明瞭な感覚を与えられている。
抑揚のない淡々とした口調が、俺の耳に届いた。
「調べれば分かる。いくら権力者と言えど、所詮は素人がやった情報操作だ。必ずどこかに穴がある」
彼の台詞に一瞬だけホッとした。どうやら家の者ではないらしい。
家の関係者ではないとするなら……。
「……おじさん、軍人だね？　それも上級将校でスパイをやってる」
今度は彼の方が驚いた。
「ほう、どうしてそう思った？」
「神山家は名門貴族で、国の重鎮を輩出している家だ。そんな権力者が隠蔽した情報を調べられるなんて、同じ重鎮か、軍のお偉いさん、もしくはスパイぐらいなもんだよ。いくら日本が情報盗み放題だからって、一般人が興味本位でできることじゃないからね。情報収集ってのは」

特に、俺みたいな一族の汚点はね、という言葉は飲み込んだ。言う必要もないし、言わなくてもこの人には既に知られているだろうと思ったからだ。

「貴方からは政治家の匂いがしない。どちらかというと軍人寄り。しかし言動から推測するに、ゴリゴリの軍人でもない。とするなら、軍の中でも特殊な任務に従事する人間……特に情報収集に関わる仕事。つまり、スパイだ」

俺の推理に、彼は口の端を吊り上げて、感心するように言った。

「流石、神山家の嫡子と言ったところか。最底辺に堕ちても、それだけの考察力と知識を持っているとはな」

スッと上げられた顔には、不敵な笑みが浮かんでいた。

鋭く、どこまでも昏い眼が俺を捉える。まるで、闇の中から覗く悪魔の眼のようだった。

ジッと見据えられ、品定めをされているかのような感覚が襲う。温度のない眼が、背筋を冷たくしていく。

感嘆と嘲笑の入り混じった声で、彼が言った。

「そんな名門貴族に生まれた人間が、よくこんな場所で生きてこれたものだ」

「生まれなんてどうでもいい。俺は何があっても生きなきゃいけないんだ。だからどんな所ででも生きてやるさ」

人間は生きようという意志さえあれば、どんな所でだって生きていける。

拝啓、泥の中で眠る貴方へ

『蓮の花は、泥の中から咲く。天に向かって真っ直ぐに、力強く咲き誇る。この花のように、何処にいても、お前らしく在れるように――』

懐かしい夢を見た。

まだ物心ついたばかりの頃、母がよく話してくれた、俺の名前の意味。

その話を聞くと、俺は何処にいてもこの人の子だと誇れたのに、今は思い出すだけで胸が痛む。

――あれ……そういえば、母さんの声はあんなに低かっただろうか？　それに、話し方も……。

揺蕩う意識の中、思考に沈みかけていた俺は、急に頭に感じた手の感触に驚いた。

冷たいけど、優しくて大きな手。まるで、壊れ物でも扱うかのような手つきで俺の頭を撫でてくるものだから、思わず吹き出しそうになった。

布団の中から、非難の声をあげてやる。

「気色悪いな」
片目だけ開けて、傍に居る男の顔を窺う。
男は撫でる手を止めず、肩を竦めて残念そうに言った。
「起きて早々の台詞がそれか？　色気がないな」
「君は俺に何を求めてるんだ？」
呆れたように言いながら、ゆっくりと上体を起こし、俺を起こしに来たのであろう人物を見る。
「起こすならもっとマシな起こし方をしてくれないか、田崎」
「起こしに来てやっただけ有り難いと思えよ、仙木」
俺たちの朝は、いつもこうだ。

＊＊＊＊

日本が敗戦を迎えてから、もう三年の月日が流れた。
俺は任務先だったドイツの敗戦後、結城中佐の命令で満州に行き、そこで田崎と再会し

た。
暫くは、互いの接触を控え、割り当てられた任務をこなしていたが、引き揚げの際には一緒の船で帰国した。
『家を用意してある。片が付くまで、そこで待機していろ』
帰国直後、何処からともなく現れた結城中佐は、俺たちに小さな封筒を渡して、再び消えた。
封筒には、少しの金と、家の住所が記された紙が入っていた。

＊＊＊＊

「ご馳走様でした」
「お粗末様」
田崎の用意した朝食を食べ終え、食器を洗う。
俺たちの間では、家事は当番制ではなく、気が付いたらやっておく、もしくは、手が空いていたらするようにしている。

洗った食器を拭きながら、田崎が聞いてきた。
「この後はどうする?」
俺は、拭き終えた食器を棚に片付けつつ、答えた。
「特に考えていない。今日は近所の畑や小学校の手伝いもないし、たまにはゆっくり休もうかと思ってるが?」
「なら、少し出掛けないか?」
「え?」
振り返った俺に、田崎が淡く笑った。
「オマエに、見せたいものがあるんだ」

七月の中旬というこの時期、外は湿気と太陽からの熱で、まとわりつくような暑さを押し付けてくる。こっちに来てからは、背広だと目立つので、着物を着て生活しているが、それでも暑いものは暑い。
茹だるような暑さの中、田崎に連れられて来たのは、家から少し歩いた所にある森だった。

「名前の亡い怪物」（九条編）

あなたが望むなら、僕は海をあげましょう。
あなたが望むなら、僕は空をあげましょう。
あなたが望むなら、僕は山をあげましょう。
あなたが望むなら、僕は何を犠牲にしてもいい。
だから教えてください。
あなたが本当に望むものは何ですか？

史上最悪の乾杯と晩餐を

――食物を愛するよりも誠実な愛はない。

バーナード・ショー「人と超人―三幕」

昼間のカフェーは、夜になると幻想的な空間を作り出す。蓄音機から流れるクラシック、小さな照明と蝋燭のみで照らされる店内、密やかに交わされる言葉たち。

男と女、大人と子供、愛と理性が緩やかに混ぜ合わさっていくこの場所は、人間の本能が可視化された姿なのかもしれない。

人間は、寝て、食べて、繁殖しなければならない。

そのために植え付けられたのが本能であるなら、本能は義務という言葉に置き換えられる。

ならば彼女の行いは、義務として正当化されるのだろうか？

そんなことを考えながら、僕はカウンター席に並んで座る女性――九条夏雅に問うた。
「一本の蝋燭と一粒のダイヤモンド、どちらに価値があると思いますか？」
九条は僕に一瞥もくれずに、群青色のカクテルが入ったグラスの縁を指先で弄びながら言った。
「実用性を重視するなら蝋燭、希少性を重視するならダイヤモンドでしょうか」
「夢のないことで」
「現実的と言ってくれません？　どちらにせよ、油か炭素の塊でしかないのですから」
そう言って、ゆっくりとカクテルを口に入れていく。
「所詮この世の全ては、小さな者たちの寄せ集めでしかない……ですか？」
昨日の講義で九条が言っていた言葉だ。
チラリ、と横に目を向けると、彼女は頬杖を突きながら、カクテルの飾りのチェリーを眺めていた。
指でヘタを摘まみ、目の前でゆらゆらと翳している。
「この世の全ては等しく、小さく在らねばならない。それが誠意であり、当然の義務なのだから。私たちは皆、生かされているんです。世界という虫篭の中でね」
淡々と語られる言葉たちが、店の喧騒に紛れて消える。
大きな世界で生かされているから、傲慢になっていいわけではない。

この世の生き物は全て、用意された虫篭に相応しい大きさで生きていかねばならない。
特に、人間は。
「生かされているのだから、それに対する対価を支払わなければならない、か……」
「『死』という対価をね」
九条はゾッとするほど冷たい声で呟き、目の前で揺らめかせていた桜色の宝石を躊躇うことなく口に含んだ。
「まあ、その逆もまた然り、ですけどね。死という契約が交わされているのだから、それに見合うだけの『生』を受け取らなければならない。死ぬためには、生きなければならないのだから」
「だから、人間を食べるんですか？」
一瞬だけ、世界から音が消えた。
音が戻る僅かな隙間に滑り込むようにして、九条が血を飲んだような赤い唇を歪ませた。
僕が『ソレ』を見たのは、ただの偶然だった。
たまたま夜の街で彼女を見かけ、好奇心から後を付けた。そして、見てしまった。
人間が禁忌としてきた、至高の食事を。
カニバリズム――所謂、食人嗜好。
外国のある地域では、食人を文化とする民族もいるが、九条のソレはれっきとした『命

の行為』だった。
生きるために殺す。生きるために食らう。
人間本来の残虐性をもった食事。
「丁寧なのか、それとも悪趣味なのか。わざわざ、家畜と同じように屠殺までして食べるなんて」
あの時見た光景を思い出す。
九条は相手を殺してから、血を抜き取り、綺麗に解体までして食べていた。
「あら。私からすれば、人間だって家畜ですよ。牛や豚なんかよりも、ずっとね」
「残った死体に花まで供えて、お礼代わりですか？」
「命あるものに対して、敬意を払っただけです。家族のお墓に花を供えるのと同じですよ」
うっとりと満足そうに微笑む彼女に、背筋が凍りそうになった。目の前の女性は、つい数日前に人を食べていたのだ。いや、もしかしたら、僕と会う前にも一人食べてきたのかもしれない。
昼食の時に姿を見なかったということは、おそらくそういうことなのだろう。
「警察や憲兵にバレずに犯罪を行うその手腕には敬服しますよ。しかし、そろそろ潮時では？」
「そうなんですよねえ……。流石に食べすぎちゃったかな、と後悔しています」

女王の憂い日

不運とは、己の意識していないところで起こるものです。
そう、何気ない日常の中、『あ、なんか今日は嫌なこと起こりそう』とか思ってる時には来ないのが不運なのですよ、奥さん。誰ですか奥さん。
例えば、朝起きて『今日は調子いいから、いい事あるぞ！』なんて意気込んで部屋から出た瞬間、電球が落ちてきたり、階段から足を滑らせて落ちたりするんですよ。不運ってそういうものなんですよ。
そして、一度意識してしまうと、その後は絶好調なぐらいに災いという災いが降ってきます。知ってるんですよねえ、分かるんですよねえ。こういうの、二十数年間で経験も学習もしてるんで。だから対処も諦めもバッチリ心得てますよ☆
「いや、それにしたってコレは無いわあ……」
「ああ!?　何か言ったか女ァッ！」
「うるさいわね、干物の分際で」
「は!?」
おっといけない、つい本音が漏れてしまいました。
口を隠そうにも、棺桶に片足半分突っ込んだ死にかけの老いぼれにあすなろ抱きに似た

格好で人質に取られてできないので、当社比でお口をミッ〇イーちゃんすることにします。
　というか、どうせ人質に取られるなら美人か可愛らしい悪女に取られたいです！　なんでこんな生きてても特に利用価値のないゴミのようなジジイなんですか。臭いわ暑苦しいわ鬱陶しいわの三拍子でスリーアウト、バッターチェンジですよ。ほら、悪女を連れてきなさい。則天武后様でも妲己様でもエリザベート・バートリー様でもいいから、とにかく悪女を連れてきなさい！と、目の前にいる小田切くんと福本くんに無言の訴えを試みていますが、二人共、白い目で見てくるので諦めます。
　いいじゃないですか、ちょっとぐらい夢見たって。人質してあげてるんだから。
　そうそう、ついでですから今の私の状況を説明しておきましょう。
　強盗犯に人質にされてます。終わり。
　うわー、我ながらなんて完璧な説明。これ以上無いほど単純にして明解、素晴らしい答えです。模範解答ではなまるぴっぴですね！
　……そんなわけあるかですよ。
　いや、何が『模範解答ではなまるぴっぴですね☆』ですか。冗談じゃないですよ自分さん。模範解答って言うより、ただ状況そのまんま説明しただけだし。誰一人として理解できてませんよ。何処でどうしてそうなった。
　という訳で一から説明するとしましょう。

私が朝起きたところは、冒頭に書いてありますので割愛しますね。

ええ、そうですよ、何の根拠もないのに『今日はいいことあるぞー！』なんて、元気百倍なつめちゃん！みたいなノリで叫んでいたら階段から落ちましたよ。ええ、いつものことです。いつものことだから泣いてませんよ！

その後、しこたまぶつけた背中やら尻やらの痛みを引き摺りながら食堂に行くと、上から電球が降ってきました。

君のような美しい電球がどうしたんだい？　今頃天界では君がいなくなって大騒ぎになっているだろうね、神様のお部屋が暗闇に閉ざされてしまっているよ？　などと落ちて割れた電球に話し掛けていたら、入ってきた福本くんに心配されました。

違うんです、ちょっとボケてみたかっただけなんです。

更にその後、買い出しのために外に出たら、窓ガラスが降ってくるわ、植木鉢が落ちてくるわ、車が突進してくるわ……。

今日は不運の日なんですかね。あ、いつも不運でしたね、私。それにしても今日は酷いですよ。ウルトラハイパー不運過ぎません？　不運のバーゲンセールでもしてるんですか？　売れ残った不運貰っても嬉しくないですよー。それとも神様を怒らせるようなことでもしたんでしょうか？

常日頃から品行方正、一日一善を心掛けて生きている私が一体何故こんな目に!?

なんて嘘言ってるから怒られたんですかね。
そして、ＲＰＧ並に起こる不運イベントを、なんとか生還するという形でクリアし、買い物を済ませて漸く帰ってこれたと思ったら突然の人質役任命。まさかの人質役。
そう、このスパイ養成学校に強盗が押し入ったのです！　どうです皆さん、驚きましたよね!?　私は驚きましたよ！『ウチにお金があると思って来たんですか!?』って！　いや、看板には『大東亜文化協會』とは書いてますよ？　だから、軍の極秘組織とは知らずに入ってきてしまったのは理解できます。中に入ったら私を除く全員がスパイ候補でした、とかどんな人間トラップですかって感じですもんね。
だからって金があると思うなよ。むしろこっちが強盗したいですよ。面倒だからしないけど。
というか、不運の極めつけが人質ってどうなんですか？
神様、不運ネタが尽きたんですか？と聞きたくなるような雑さを感じるんですが。
いや、雑になるのはいいですよ？　面倒ですもの。
労働は尊いけど面倒くさい！　楽して働きたい！というのは素晴らしい意識だと思います。私も働かずにお金だけが降ってくるような人生を満喫したいです。
でもね、雑にするぐらいなら不運バーゲン終わりましょうよ。今すぐ強制閉店してくださいよ。人質とかやる気ないですよ。神様までブラック企業開業とかやめてくださいよ。

「声失き歌姫」（雪沢編）

人が消えれば、君が泣かずに済むと思った。

誰も君を傷付けないから。

世界が消えれば、君が救われると思った。

醜いモノが全て無くなるから。

君を傷付けるこんな世界が、早く滅びますように。

主よ、われは深き淵より乞い願う

Aus der tiefen rufe ich, Herr, zu dir.
Herr, höre meine Stimme,
laß deine Ohren merken
auf die Stimme meine Flehens!
(ああ主よ　われふかき淵より汝をよべり
主よ　ねがわくはわが声をきき
汝の耳を
わがねがいの声にかたむけたまえ)

ヨハン・ゼスティアン・バッハ
教会カンタータ『Aus der Tiefen rufe ich, Herr zu dir』より

警視庁D課は、今日も今日とて暇を持て余していた。

俺達が担当する事件は、普通の捜査が不可能なものや、刑事課で担当できない裏の事件ばかり。が、逆に言えば、普通の人間で事足りる事件には、俺達のような特殊な人間は不要だ。仕事が来ないということは、世間が平穏無事であるという証左なのだから、良しとするべきなんだろうが。

――暇だ。

勤務中に暇とは何事だ！　なんて声が聞こえてきそうだったが、暇なものは暇なのだ。柊にラインでもして構ってもらおうかと思ったが、もうすぐ新刊の締め切りだったのを思い出し、スマホに伸ばしかけた手を止めた。

構ってもらいたいけど、仕事の邪魔はしたくない。甘えるのは、柊の仕事が終わってからでもいいし、むしろそっちの方がいい。

気分を紛らわそうと、数分前に入れたコーヒーを飲み、古びたパイプ椅子にだらりと凭れる。

ふと、点けっぱなしにされていたテレビから、聞き覚えのある音楽が流れてきた。

画面を見ると、この近くの商店街が映っていた。

『街の商店街では、中央に大きなクリスマスツリーが飾られています！　例年と比べ……』
「おー。でかいねー」
「今年は寄付金を集めて、去年より一回り大きいのを買ったそうですよ」
「そういえば、子供たちが楽しそうに飾り付けを手伝っていたな」
甘利、実井、福本が順にツリーの感想を言っているのを聞き流し、商店街のスピーカーから流れてくるＢＧＭに耳を集中させた。
買い物客の騒音と、マイクで拡張されたアナウンサーの甲高い声を取り除き、小さな音を拾い上げる。
――この曲……。
「神永」
横から声を掛けられ、ハッとする。至近距離まで来られていたことに近付かないほど、聞き入ってしまっていたようだ。
呼んだのは同僚の田崎だった。
「どうした、田崎」
「そろそろ外回りの時間だ。行くぞ」
「はいよー」
Ｄ課が特殊な部署で、組織図にも記されていないとはいえ、一応は警察庁の一部。

内部からの反発を防ぐために、見かけだけでも仕事をしておけと結城課長に言われているので、たまに外回りと称した暇潰しに行くことがある。
今日は俺と田崎が担当だ。
コートを羽織り、部屋を出る。
時間は昼前。軽く腹拵えするか。
「田崎、お前メシ食った？」
「いや、どうせ外回りだし、どこかで食べようかと思っていたところだが？」
「んじゃ俺も。なーに食べるかなー」
「商店街に行くんだろ？」
田崎の台詞にピタリと足を止め、振り返る。
ニヤニヤと揶揄うような笑みを浮かべ、田崎は俺を伺っていた。
行くのか、ではなく、行くんだろと聞く辺り、コイツは相当意地が悪い。疑問符付ける意味ねぇだろ。
「……俺、お前のそういう所、ホンット嫌い」
「褒め言葉として受け取っておく」
そう言って、俺の隣を歩き出す田崎の横顔に、心の中で唾を吐いた。

君だけが、僕の世界の全てだった

君が眠る隣で、俺は凍える夜に願いました。
太陽なんて滅びてしまえと。
君が抱きしめてくれた腕の中で、俺は美しい月夜に祈りました。
明日なんて来なければいいと。
そして、君の安らかな寝顔を見て、俺は寂しい夜に絶望したのです。
いつまでも続く日々に。
ああ、どうか。どうかその目が開きませんように。
俺の醜い姿を、君の瞳が映しませんように。
彼女の目が開く前に、神様、どうか俺を――。

夜が嫌いだった。
特に冬の夜は真っ暗で、底冷えする寒さを与えてくる。
昔から、暗くて寒い所が嫌いだった俺は、冬という季節がなくなればいいのにと思っていた。
いや、冬だけじゃない。これまでも、これからも、ただただ過ぎていくだけの季節なんて、消えてしまえばいいのに……そう、願っていた。
彼女に――柊に会うまでは。
柊に出会ってから、どんな季節も、どんな場所も輝いて見えた。
春の桜が咲く近所の公園も、夏の緑に覆われた校舎も、秋の匂いが満ちる商店街も。
今まで見てきた当たり前の日常が、泣きたくなるほどに大切なものになっていった。
まるで、少女漫画の主人公のように、俺の世界は一変した。
あんなに寒くて暗いからと嫌っていた冬の夜空も、柊と見上げれば、この世で一番美しく、尊い景色に変わった。
俺にとって、柊だけが、世界の全てだった。
だから、あの事件が起こった時、俺の世界は崩壊しかけた。

キラキラと光る欠片。
それは太陽の光に反射して、天使の羽のように降り注いだ。
透明な羽は、澄んだ音を響かせながら、ゆっくりと砕けていった。
神の加護にも似たそれは、無慈悲にも俺の世界を奪ったのだ。

ふっ、と意識が急浮上し、何の淀みもなく目が覚めた。
部屋の中はまだ暗く、時計を見れば、今が夜中であることを示していた。
意識が完全にクリアな状態で目が覚めたせいで、二度寝ができないことを悟る。
さて、どうするかと思案しようとした瞬間、体中が冷水を浴びたように冷えた。
起き上がって見ると、隣にいるべき人がいないことに気付いた。
――柊がいない！
空いた空間を探ってみるが、入る前と変わらない温度になっていた。抜け出してから、かなりの時間が過ぎているということだ。
こんな夜中に何処に？　何のために？
いや、それよりも、帰ってきてくれるのか？

俺を置いて、何処かに行ってしまったんじゃないのか？
あの時のように。

キラリと光る鋭い羽。
甲高い悲鳴。反響する雑音。そこに紛れる、愛しい人の名前。
真っ赤な血が地面を濡らし、花を汚す。

フラッシュバックする映像に、胃がキリキリと引き絞られるような痛みに襲われる。
嫌だ。嫌だ！
「ひ、いらぎ……柊……」
突然、世界が消え、目の前がぐにゃりと歪んだ。
指先や爪先から血が凍り、体の奥へと冷気が入り込んでいく。肺の中から、白く冷えた息が吐き出され、額に脂汗が浮かぶ。
冷たい海に投げ出されたかのように体は冷え切っているのに、感情だけがマグマのような熱を持ち始める。
嫌だ。行くな。俺を置いていかないで。独りにしないで。
君がいないと息すらできない。傍に居てくれないと寒くて動けない。嫌だ。寒いのは、

暗いのは、嫌なんだ。独りは嫌なんだ。